

中山古墳群

—平成5年度実態調査概要報告書—

1994年3月

島根県邑智郡石見町教育委員会

中山古墳群 正誤表

頁	行	誤	正
1	4	団体営	団体営
2	13	機運が高まり	気運が高まり
6	2	石見町は、かつて	石見町は、かつて
下から 5		そのうち1号主体は	そのうち1号主体は
下から 3		木蓋状の	木蓋状の
7 下から 9		河岸段丘上に	河岸段丘上に
8 下から 12	10 m × 5 m	10 m × 5 m	10 m × 5 m
9 1	2点出土した。	2点出土した。	2点出土した。
14 1	西側で淡橙色、	西側で淡橙色、	西側で淡橙色、
3	部位もな検出されず、	部位もな検出されず、	部位も検出されず、
8	長さに約13m、	長さに約13m、	長さ約13m、
下から 13	トレンチ外にも一部	トレンチ外にも一部	トレンチ外にも一部
16 表	D-6,7,8,16,17 平成3(1990)	D-6,7,8,16,17 平成3(1991)	D-6,7,8,16,17 平成3(1991)
下から 5	分布調査が待たれる。	分布調査が待たれる。	分布調査が待たれる。
18 3	墓域7ヶ所が確認	墓域7ヶ所が確認	墓域7ヶ所が確認
19 下から 3	長さ15.5cm、幅5cmの	長さ15.5cm、幅5cmの	長さ15.5cm、幅5cmの
21 3	長さ14m、幅13m	長さ14m、幅13m	長さ14m、幅13m
4	長さ8m、幅10.4m、高さ	長さ8m、幅10.4m、高さ	長さ8m、幅10.4m、高さ
23 頁番号	-23-	-24-	-24-
24 頁番号	-24-	-23-	-23-
26 9	棺内より～1	棺内より～1	棺内より鉢1
27 下から 9	地造成による	地造成による	造成による
28 (註)	重圓文(～製)鏡	重圓文(仿製)鏡	重圓文(仿製)鏡
	小型～製鏡	小型仿製鏡	小型仿製鏡
29 第9図	等高線の標高	224・225・226・227・228・229・230	224・225・226・227・228・229・230
30 4	によって明かとなつて	によって明らかとなつて	によって明らかとなつて
図版説明	実藤古墳全景	実藤古墳全景	実藤古墳全景
34 10	所在が明かとなつた	所在が明らかとなつた	所在が明らかとなつた
12	D2のいづれの	D2のいづれの	D2のいづれの
下から 2	大部分が末惠器出現	大部分が須恵器出現	大部分が須恵器出現

例　　言

1. 本書は平成5（1993）年度国庫及び県費補助を受けて実施した、邑智郡石見町に所在する中山古墳群の発掘調査（範囲確認、尖端調査）概要報告書である。

2. 調査は、以下のように組織し実施した。

調査主体 石見町教育委員会

調査指導 島根県教育委員会文化課

島根県文化財保護指導員 吉川 正

調査担当 島根大学法文学部 教授 田中 義昭

現場作業 島根大学法文学部考古学研究室及び島根大学考古学研究会 学生

調査補助 石見町教育委員会社会教育課主任主事 中田 健一

事務局 石見町教育委員会 教育長 三浦 勇

石見町教育委員会 社会教育課長 土井 久夫

3. 現地調査は、平成5年9月20日から11月30日の間に、延べ14日実施した。

4. 本書の編集、執筆は中田が行った。

5. 本書に使用した北方位は、M.Nの表記が磁北、そのほかは国十座標系第3系の軸方向である。

目 次

I.	発見と経過	(1)
II.	古墳群の位置と環境	(4)
1.	地理的位置	(4)
2.	歴史的環境	(6)
III.	調査の概要	(8)
1.	A地区の調査	(8)
2.	D地区の調査	(14)
IV.	古墳群の概要	(16)
1.	古墳群調査の経緯と概要	(16)
2.	A地区	(17)
3.	B地区	(18)
4.	C地区	(25)
5.	D地区	(27)
6.	周辺の墳墓群	(30)
V.	今後の課題	(34)

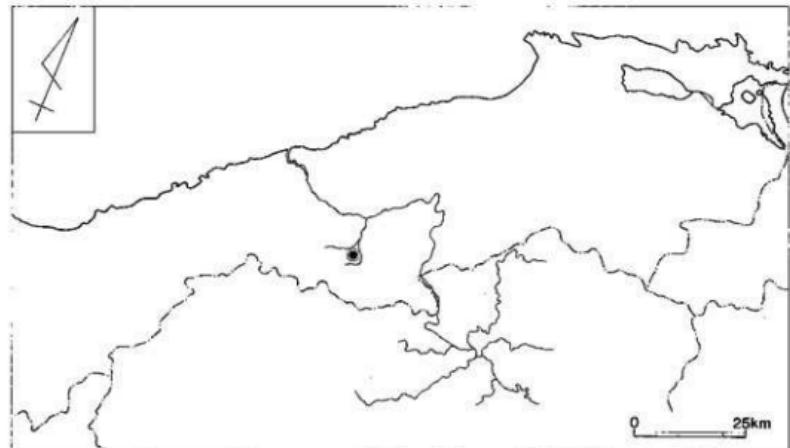
挿 図 目 次

第1図	中山古墳群位置図 (1:1,250,000)	(1)
第2図	周辺遺跡分布図 (1:25,000)	(5)
第3図	A地区調査地点測量図 (1:400)	(9)
第4図	A地区土層断面図 (1:40)	(11.12)
第5図	D 1 地点上層断面図 (1:40)	(13)
第6図	中山古墳群全体図 (1:12,500)	(15)
第7図	B地区北半部遺溝配置図 (1:600)	(18)
第8図	D-S K19~21測量図 (1:300)	(28)
第9図	D-S K16周辺図 (1:300)	(29)
第10図	下川原1号墳・2号墳配置図 (1:600)	(31)
第11図	下川原3号墳・土壙墓群・横穴墓配置図 (1:600)	(33)

I. 発見と経過

島根県邑智郡石見町大字中野地区から井原地区にかけて所在する中山丘陵に中山古墳群が発見されたのは、昭和51（1976）年のことである。中山丘陵では昭和48（1973）年から4年間の継続事業として石見町と石見町十地改良区が団体営中山農地開発事業を実施していたが、この造成工事が通称「中山古墳」に及ぶことを察知した瑞穂町在住で島根県文化財保護指導員の吉川正氏が、造成中の現地に赴いたところ丘陵全体に墳墓が分布することが判明したのである。もともと、この中山丘陵には、門脇俊彦氏（故人）が発見していた大峰山古墳群が北辺に、吉川正氏が発見していた「中山古墳」が南辺に確認されていた。大峰山古墳群は、箱式石棺等を埋葬主体とし計7基からなる古墳群であり、古式の須恵器や銅鏡の発見が知られていた。また、南辺の「中山古墳」は箱式石棺を埋葬主体とし、6～7mの墳丘を持つ古墳であると確認されていたが、「中山古墳」の周辺に古墳が群集している可能性を吉川正氏が指摘していたのであった。しかし丘陵の全体に多くの古墳が分布していることは予想だにされていなかった。

中山古墳群が発見された時点で、農地開発造成工事は丘陵の約4分の1程度に進行しており、また、まさに削り取られつつある古墳もあり、連絡を受けた石見町教育委員会（以



第1図 中山古墳群位置図 (1 : 1,250,000)

下、「町教委」という。)では早速、取扱いについて関係各機関と調整を行なった。その結果、次のような対応の方針が決まった。(1)中山丘陵を地形のうえから便宜上AからDの4地区に分け、古墳の大半をのせたD地区は計画外にあたるため問題はないが、これとつながるC地区については一部造成が予定されているのでこの部分は計画を変更し、現状の保存を図る。(2)造成その他によりすでに他の丘陵から孤立したA、B地区には数基の古墳と他に土壤墓の存在が予想されるので全面発掘を行い、その結果に基づいて改めてその取扱いに関する協議を行なう。(3)D地区については将来的な保存計画を計るために機会を得て、詳細な分布調査を実施し、古墳群全体としての様相を把握する。この方針に基づいて、昭和51(1976)年にA、B地区について国庫及び県費補助を受け、島根県教育委員会文化課(以下、「県文化課」とする。)の協力のもと町教委が主体となって発掘調査が実施された。翌昭和52(1976)年には古墳群全体の分布調査が実施され、D地区の北側にE地区、A地区の南側にF地区が確認された。

その後C、D地区の保存計画策定の機運が高まり、「その地区内に所在する古墳の分布状態を明らかにするとともに、1基を発掘調査してその内容を明らかにすることにより将来にわたる古墳群保存整備のための資料を得よう」ということになった。そのため石見町は昭和56(1981)年に国庫及び県費補助を受け、C、D地区の古墳の分布状況を確認するとともに、D-23号墳では門脇俊彦氏を中心として発掘調査が実施された。

昭和63(1988)年には、島根石見農業協同組合からA地区に株式会社いわみトップノーキューを建設したいとの開発協議が町教委にあった。建設用地には古墳は確認されていなかったが、土壙墓等の遺構の存在が予想され、また過去の調査、その経緯を考え合わせ町教委では現状変更は避けるべきと判断し、場所変更を含め協議を行ったものの、他に適当な工場用地がないとの理由で現地に着工したいとの回答を受けた。町教委では県文化課と協議し、県文化課と吉川正氏に現地の踏査を依頼した。吉川正氏の踏査の結果、約160m²を発掘調査することとし、浜田市在住で島根県文化財保護指導員の宮本徳昭氏に調査を委託し発掘調査に着手した。ところが発掘調査中に島根石見農業協同組合から工場敷地拡大等の申し入れがあった。再度、町教委では県文化課と協議し、その部分についても発掘調査を行うこととした。調査の結果、A-SK06が確認されたが、幸いこの古墳は建物部分には関係しないことから敷地造成工事の計画を変更し、発掘調査の後、現地保存されることとなった。平成2(1990)年、平成3(1991)年には、町内遺跡詳細分布調査の一環として、調査主体である町教委と地元の歴史サークルである故里を探る会が中心となって島根大学の協力を得ながら、C、D地区の測量調査が実施された。平成4(1992)年には、

中山古墳群の価値を地元として再認識したいとの要望が故里を探る会から町教委にあり、島根大学の援助を受けてC-SK07の発掘調査と周辺の測量調査が実施された。

平成5（1993）年早々、不測の事態が起こった。中山古墳群付近在住の故里を探る会会員より町教委に、「中山古墳群A地区で重機によって掘削が行われている」との情報が入った。町教委の職員が現地に急行したところ、現地保存がなされていたA-6号墳が重機によって破壊されつつあり、周辺も攪乱されていた。工事を行なっていた業者に工事の詳しい事情を聞いた結果、圃場客土用の土砂採集であることが判明した。町教委では関係各機関に連絡し、事業主体者に対して再びこのような事態を起こさないこととの確約を得るとともに、町教委としても中山古墳群存在とその意義の周知をすすめることになった。

このように中山古墳群をとりまく環境は、発見から現在に至るまで保存活用への取り組みと用地造成等の開発行為との狭間にあったといえよう。こうした開発行為の対象となる一つの原因是、中山丘陵が石見町中野地区、井原地区とのあいだにある低丘陵であり、山地を除いた於保地盆地のなかにあって、用地としては絶好の位置にあることがあげられる。近年の高速交通網の整備の一環のなかで、また地域活性化の開発計画のなかで常に開発の情報も絶えないところである。今回の調査は、このような経緯をふまえ古墳群の範囲確認及び実態調査を目的とし、町教委が主体となって、国庫、県費補助を受け、島根大学の協力を得て実施した。この調査事業のねらいとしては、(1)攪乱されたA地区の確認調査を行い、この地点の保全を計る。(2)マウンドが確認されていないD地区の2カ所を発掘し、範囲の確定、土壙墓等の有無を調べ、併せて古墳群の性格の解明の手立てとする。(3)これまでの調査成果を概説的に網羅し、古墳群の重要性の再認識をはかる。の3点である。



花木團地造成工事（完成時撮影）

II. 位置と環境



於保地盆地の空撮

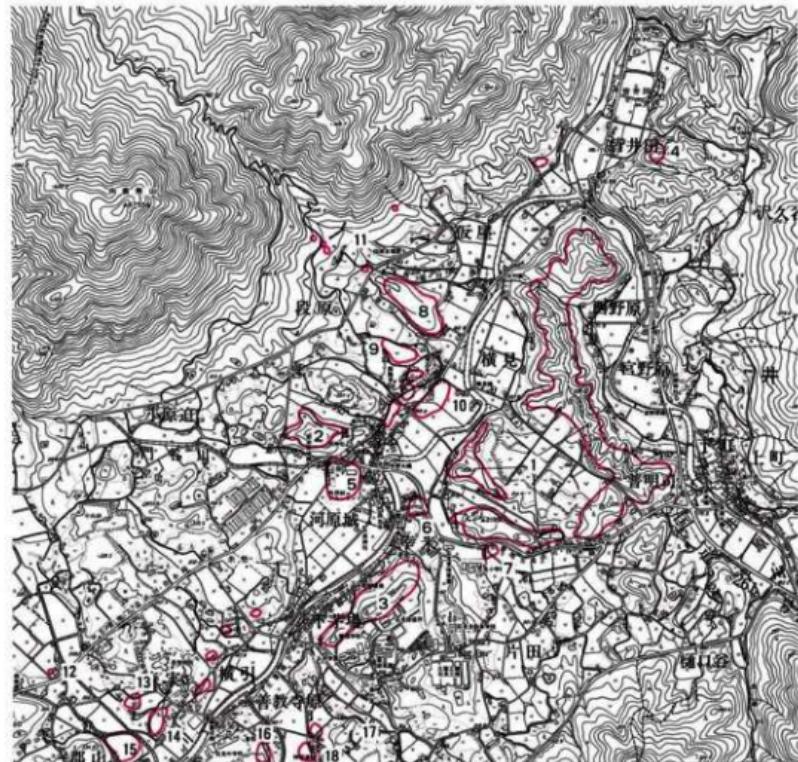
1. 地理的環境

中山古墳群の所在する於保地盆地は島根県の中央部山間地帯にあり、盆地の中心を貫流する矢上川は中山丘陵北端で井原川と会し濁川となり、川本町因原で江川に合流する。濁川の流域には蛇行距離約3.6m、比高差約120mの渓谷で、国指定の名勝地、断魚渓があり、他にも山間地帯から江川にかけては瀑布線にあたり千丈渓などの渓谷が見うけられる。邑智郡南部の石見町、瑞穂町一帯は邑智高原とよばれ、中国山地の高原部に属している。邑智盆地の平坦地の標高は150mから300mで、周辺をとりまく山々は標高888mの原山、標高859mの冠山、標高826mの京大郎山の通称三山がそびえ、それから派生する標高500~600m級の連山が周辺を囲んでおり、これらを三山塊ともいう。山塊と平地の傾斜変換点はおおよそ等高線300mあたりとなる。矢上川を中心に森実川、大畠谷川、茅場川等の支流が扇状地をなすが、その盆地内には、無数の鉄穴流し残丘があり、古来より人為的に地形改変が行われていたことを示す。

古墳群のある中山丘陵は、この盆地の東側にあって原山山塊のひとつ東明寺山からの分離丘陵である。分離された丘陵鞍部は交通のポイントともなっており、中山丘陵を挟んで

東側が井原川流域の井原地区、西側には矢上川流域の中野地区、矢上地区という位置関係で、中山丘陵が井原地区と中野地区の中間の場所であるので中山、大峠山などの地名が残るともいわれる。

交通としては盆地内を東西に走る県道浜田作木線、陰陽の横断路で井原川沿いを南北に走る国道261号線が主幹道路であり、近年には中国横断道開設に伴い原山を抜けるトンネルを通り瑞穂町市木の瑞穂インターチェンジに結ぶ原山雲海ロードが開通し、高速交通網の整備が進みつつある。



第2図 周辺遺跡分布図 (1 : 25,000)

1. 中山古墳群
2. 加茂山古墳群
3. 下川原塚古墳群
4. 実藤古墳
5. 余勢の原遺跡
6. 和泉原遺跡
7. 片田遺跡
8. 佐屋遺跡
9. 反屋遺跡
10. 池の尻遺跡
11. 佐屋段築子塚群
12. 割田古墳
13. 名子山遺跡
14. 森ノ下遺跡
15. 郡山遺跡
16. 茅場谷遺跡
17. 行広遺跡
18. 神田遺跡

2. 歴史的環境

石見町は、かつて大正3（1914）年に中野地区仮屋遺跡から流水紋銅鐸、袈裟襟紋銅鐸の二つの銅鐸が出土し早くから注目されていた地域であった。

旧石器、縄文時代の遺跡、遺物としては、ドンデ遺跡から尖頭器、小掛谷遺跡からは織維混入の縄文土器の出土があり、また断魚渓築堤遺跡から発見されたといわれる縄文後期異形壺形十器の兜形品は有名である。当該期の遺跡は他にも大原遺跡、天成寺原遺跡などがあげられるが、町内の遺跡総数からみる割合は少ない。

弥生時代では、前期の土器を出土し拠点的な集落跡ではないかと推察される余勢の原遺跡、その対岸にある和泉原遺跡を筆頭として、中野地区仮屋、段原に分布する多くの弥生時代遺跡群があげられる。前述の仮屋銅鐸出土地も、それら遺跡群のなかに位置づけられる。これらはいずれも中山丘陵を眼前にする場所に位置し、丘陵のなかにある墳墓群との関わりが注目されるのである。余勢の原遺跡では町民グランド改修工事の際に多量の土器が出土し明らかになった遺跡で、平成5（1993）年、勤労青少年ホーム建設工事に伴う事前調査として町教委がその一部について発掘調査を行い、弥生時代中期頃と推定される溝等を検出している。仮屋遺跡（銅鐸出土地）では平成元（1989）年に鳥根大学を中心として学術調査がおこなわれ、出土の言い伝えのある場所付近から検出された土壌より銅鐸の破片が出土、埋納壙ではないかと推定され、青銅器埋納について貴重な資料を提供した。

墳墓としては余勢の原遺跡より南、矢上川対岸の下川原遺跡が発掘調査されている。この遺跡の西側尾根上にて弥生時代後期の土壌墓、土器蓋土壌墓等、合計6基の埋葬遺溝が検出されている。

古墳時代の遺跡では、中山古墳群と同様の小規模な古墳が周辺の尾根上に相次いで発見されている。余勢の原遺跡の北側の低丘陵である加茂山には総数15基以上あるとみられる加茂山古墳群が所在する。この古墳群は測量等の調査が行われていないため詳細は不明であるが、丘陵頂上部にある1基は箱式石棺を埋葬主体としており、墳丘の規模も古墳群中では最大である。矢上川南岸には下川原古墳群が位置する。前述の下川原遺跡の一部で発掘調査によって古墳が3基検出された。1号墳は直徑約17mの円墳で2基の埋葬主体が検出され、そのうちの1号主体はくり抜き形の木棺の合わせ口を黄色粘土で密封するという、丁寧な埋葬の手法が採用されており、内部からはガラス小玉の他に「U」字状に折り曲げられた刀が出土した。2号墳は直徑約7mの円墳で、埋葬主体は木蓋状のものを被覆した上墳墓と推定され、周溝の尾根側部分より丸底壺1、鉄斧1、堅櫛5、玉類約240点が出土している。3号墳は直徑約10mの円墳で、周溝より鐵製鍬先が出土しているが、現状保

存の措置がなされたので埋葬主体については不明である。この下川原古墳群から出土した堅櫛は島根県西部では初見であることを見はじめ、他の遺物や遺構から窺える埋葬方法等貴重な資料を提供している。古墳時代後半の遺跡としては、中山丘陵の北側、井原川と矢上川が合流する地点の東側の尾根上には実藤古墳が発掘調査されている。直径約10mの円墳で、埋葬主体は木棺直葬であって、周溝より上師器、須恵器の他、U字形の鉄製鍬先が出土している。この古墳は須恵器より6世紀中ごろから後半と推定されている。また前述の下川原遺跡より横穴墓が1基発見されており玄室内部から人骨2体が確認され、遺物として須恵器の他、円頭大刀1、直刀1、鞍金具1、鐵鎌等が副葬されていた。石室をもつ古墳では、中野地区東部で仮屋A古墳、同B古墳、大高下原古墳群（2基）、水越古墳群（3基）などが確認されているが、すでに改変消失したものもあり詳細は不明な点が多い。

中野地区西部、矢上地区との境界となっている森実川流域では、県指定史跡の割田古墳、塔の本古墳、後原古墳があげられる。割田古墳は昭和44（1969）年に発掘調査が行なわれ無袖の横穴式石室が確認されている。塔の本古墳は調査が行われていないものの石室から、鐵鎌、玉類、直刀、馬具が昭和27（1952）年に発見されている。当該期の集落跡としては、調査された例として神田遺跡が知られている。この遺跡は下川原遺跡から西側の茅場川流域河岸段丘上に営まれた規模のやや大きな遺跡で、昭和48（1973）年に基礎整備事業に伴い試掘調査が実施され住居跡が確認されている。遺物は須恵器の蓋杯、壺、土師器の甕などが出土しているが、須恵器の蓋杯は陶邑編年MT15型式併行期と推定されるものが出上している。

森実川流域で割田古墳対岸の血取場遺跡は平安時代中心の遺跡であるが、調査区内に古墳時代と推定される住居跡が検出されている。加えて規模は小さいながらも矢上川上流には狭間遺跡、大原遺跡が調査されている。他にも町内各所、各遺跡から古墳時代後期の遺物が多数採集、発見されているものの不明な部分がおおく、今後の調査によって新たに発見され解明が進んでいくと思われる。

III. 調査の概要

1. A地区の調査

今回調査を実施した調査区の位置は、A地区主脈とは尾根を別にする場所で、尾根筋からみるとF地区の尾根の延長線上にある。しかし先に述べたように、この場所は昭和63（1988）年の調査後、いわみトップノーキョーが建設されており、その後残存していた遺跡の一部が破壊、加えて表土が



A地区調査前

擾乱されたため、現在では完全にF地区の尾根とは分離されている。また調査区南側は民家が近接し高さ10m程度の崖となっている。

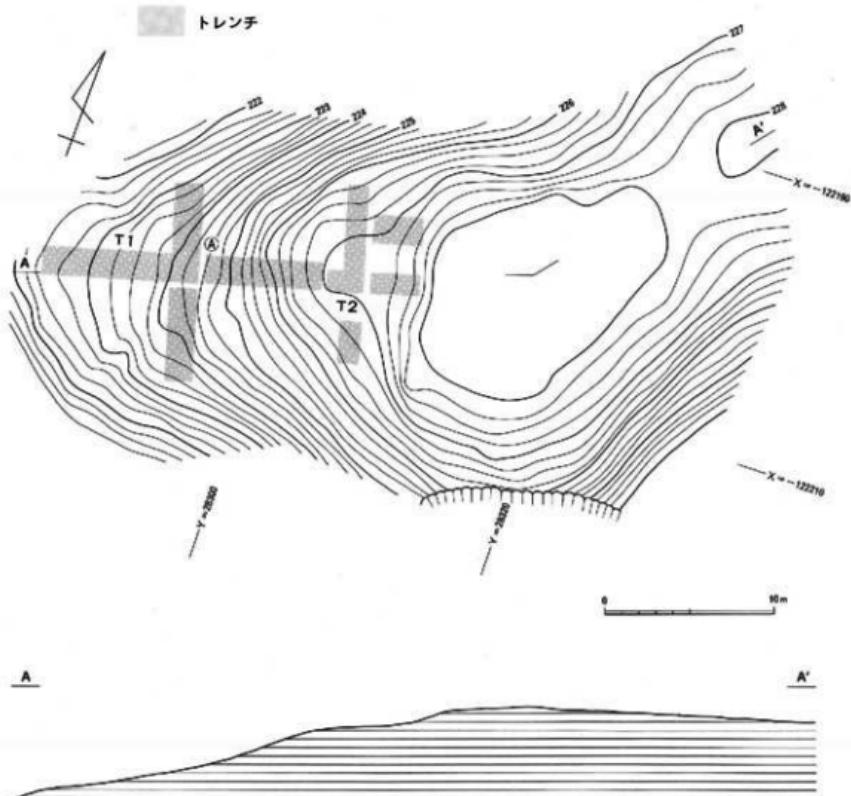
調査は擾乱された部分の表土剥ぎ及び遺構検出と、分布調査で確認されている平坦地の試掘調査を実施した。擾乱部分については、全面の表土を除去、地山面を検出した後、遺溝検出作業を試みた。結果として、部分的には予想以上に重機による掘削を受けており、また遺物も近世末・近代の陶磁器のみで、遺溝は確認されなかった。

平坦地の調査区では、二つの平坦面を確認していた。このうち尾根頂上部にある平坦地（頂上平坦地）は丘陵東南の尾根上にある平城跡の遺溝の一部ではないかとの指摘がなされている平坦地である。もう一つの平坦地は頂上平坦地の西側に近接し、地形測量では約10mX5mの方形状の平坦地（方形状平坦地）であって古墳の可能性が想定されていた。これら二つの平坦地の西側にやや傾斜が緩やかに変換する地点（変換A地点）があり、そこから約5m下ると擾乱部分の端にいたるという位置関係である。調査は擾乱部分から尾根上平坦面に向けて、尾根の中心を通過するように任意で幅2mのトレンチを設定し、掘り下げを行なった。

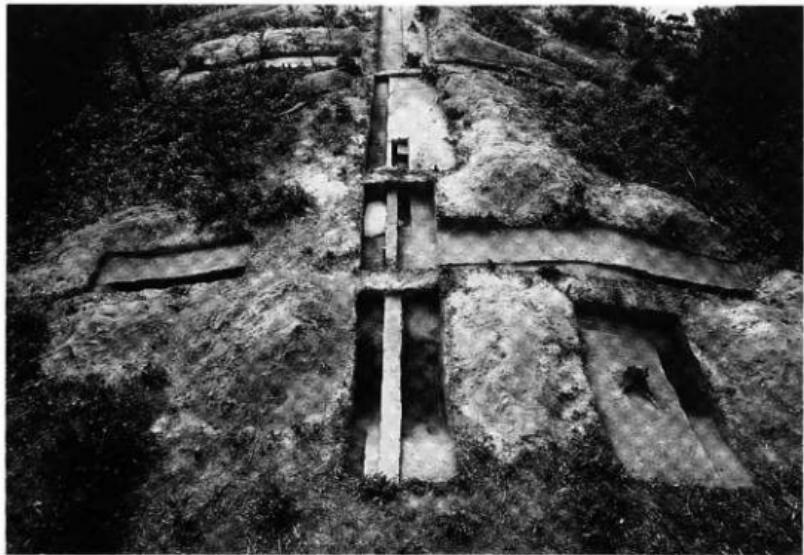
第1トレンチ（T1）では、表層土と約10~20cmの黄褐色土を除去すると地山面と思われる黄燈色粘質土を検出した。このT1は傾斜変換A地点で主軸より直角北方向に5mほどトレンチを拡張したが、遺構遺物ともに検出されなかった。この拡張部分とは反対方向に約7mトレンチを設定し同様に地山面まで掘り下げを行なったところ、トレンチ南隅に近い部分で須恵器の小片が出土した。

第2トレンチ（T2）は、変換A地点方向から方形状平坦面の中心にいたるトレンチで、T1と同様に表土を除去していった。変換A地点から方形状平坦面にいたる斜面では黄燈

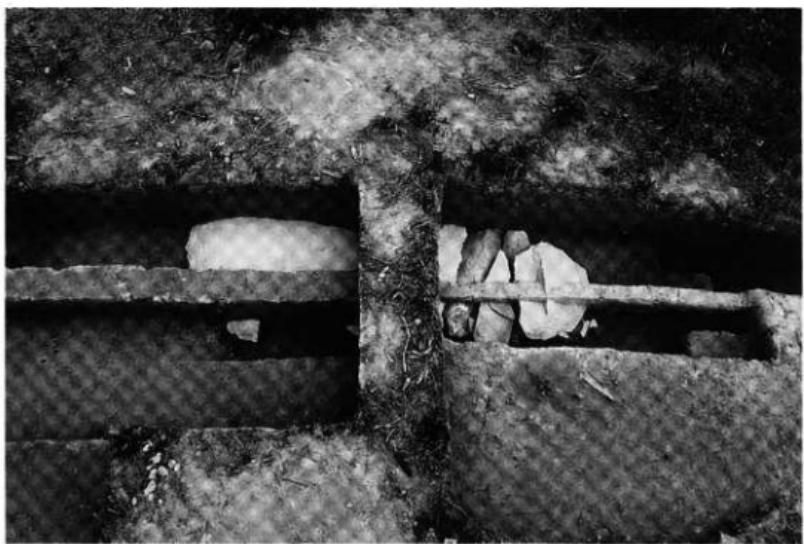
色粘質土の上面にて須恵器片が2点出土した。平坦地に近い部分では、地山とは違う性質の暗褐色土が確認された。サブトレンチによりこの土を掘り下げたところ、箱形石棺の蓋石が検出された。よって方形状平坦面は墳墓であると判明、SK07と附番した。調査はさらに土層観察用の畦を残し掘り下げたところ、尾根の主軸に沿う形で石棺が検出された。次にこのマウンドの形状を確かめるため、T1トレントを90°北方向に拡張し、他に3カ所のトレントを設定、掘り下げたところ、それぞれのトレントで周溝状に掘りくぼめられていることを確認した。



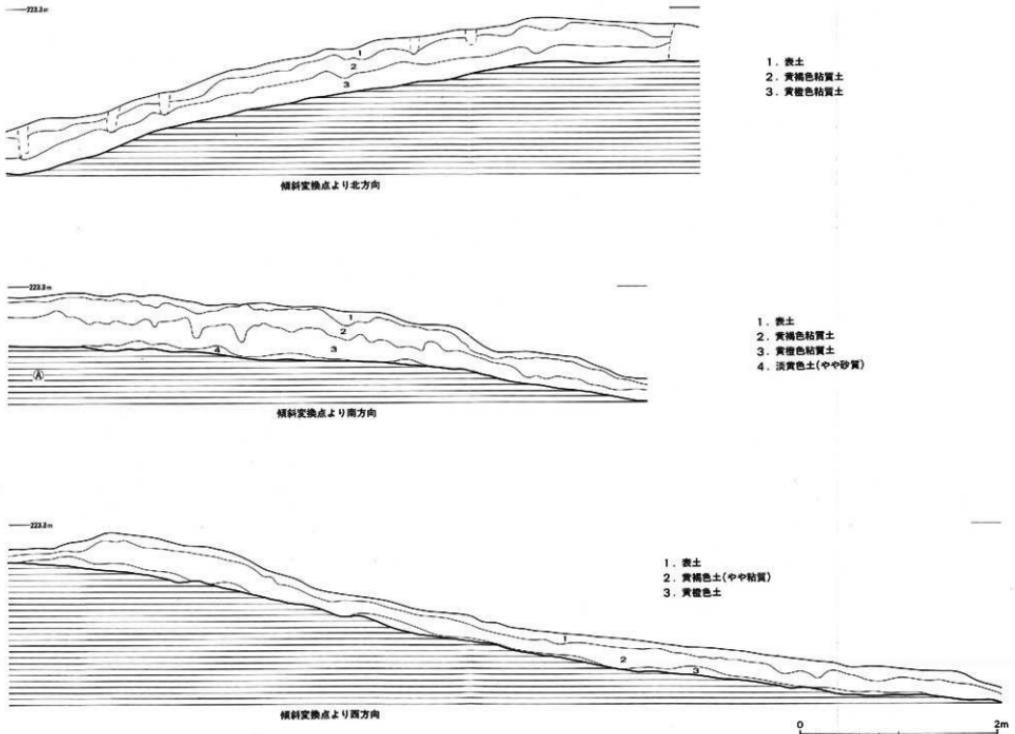
第3図 A地区調査地点測量図 (1 : 400)



A-SK07全景



A-SK07主体部



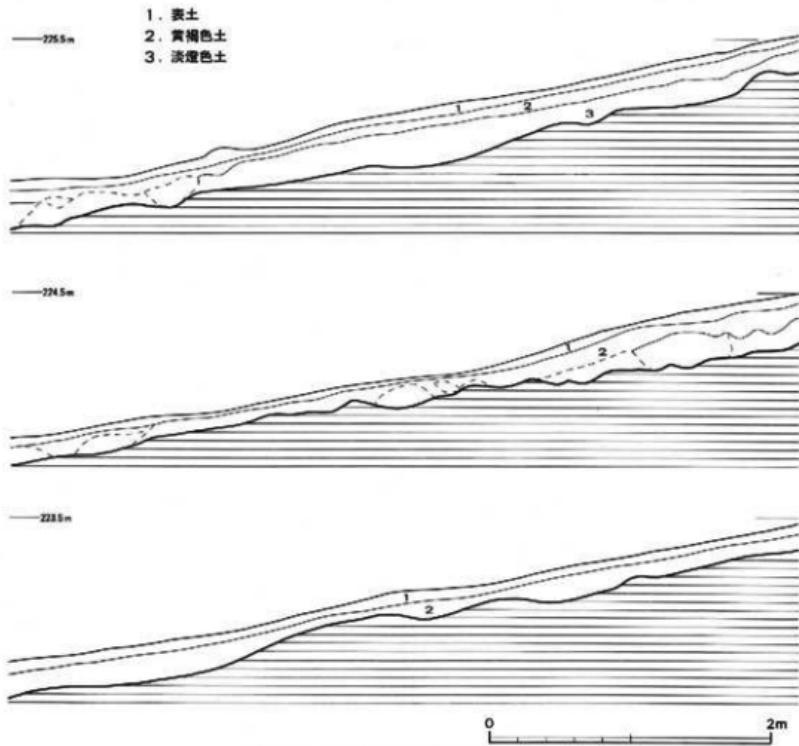
第4図 A地区第1トレンチ土層断面図 (1 : 40)

2. D地区の調査

D地区では2つの地点で試掘調査を行なった。D1調査地点はD-25号墳より西側にのびる尾根上で、分布調査では古墳が確認されておらず、なだらかな斜面が続く場所である。D2調査地点はD地区北端のD-33号墳より西側にかけての若干の平坦面で、同じく古墳は確認されていない場所である。以下、今回のD地区の調査について述べる。

(1) D1調査地点

この調査地点では斜面中心に幅1m、長さ約20mのトレンチを設定し掘り下げを行なった。褐色の腐食上、表層土を剥いだところ、トレンチ西側では黄色のやや硬いベース面を、またトレンチ中央部から東側にかけて黄褐色土層を検出した。この層はしまりが悪く、やや粘質を帶びており地山であるとの判断がつけにくかったため、トレンチの半分をさらに



第5図 D1地点土層断面図 (1:40)

断ち割ることとした。掘り下げるにしたがって土色が東側と西側でやや淡褐色、中央部で白色に変化したが、風化した礫を含むようになり、地山であったと判断するに至った。結果としてトレンチ全体については遺溝とみられる部位も検出されず、遺物も出土しなかった。

(2) D 2 調査地点

この調査地点では東西方向にのびている平坦面のほぼ中心に長さ約13m、幅約1.5mのトレンチを設定し、これに直行する形で北方向に長さ2m、南方向に長さ3m、幅1.5mのトレンチ、北方向に長さ3m、南方向に長さ3m、幅1.5mのトレンチの計2箇所のトレンチを設定



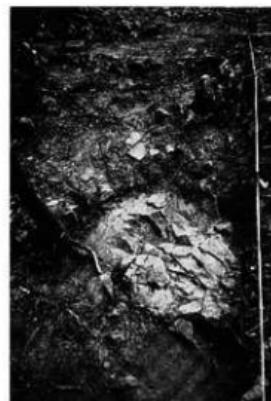
D 2 調査地点全景

し、掘り下げを行なった。表土を除去するとすぐにトレンチ全面から礫が検出された。この礫は風化した岩盤の自然石とみられ、トレンチ外にも一部地表面より露出しており、この調査平坦面は、一面に風化の岩盤が広がっていると推定された。調査はこの礫を除去し、部分的に断ち割りを行なったが、礫の下からは、黄褐色粘質土が検出され、地山であると断定するに至った。この調査地点においても、遺溝、遺物とも検出されなかった。

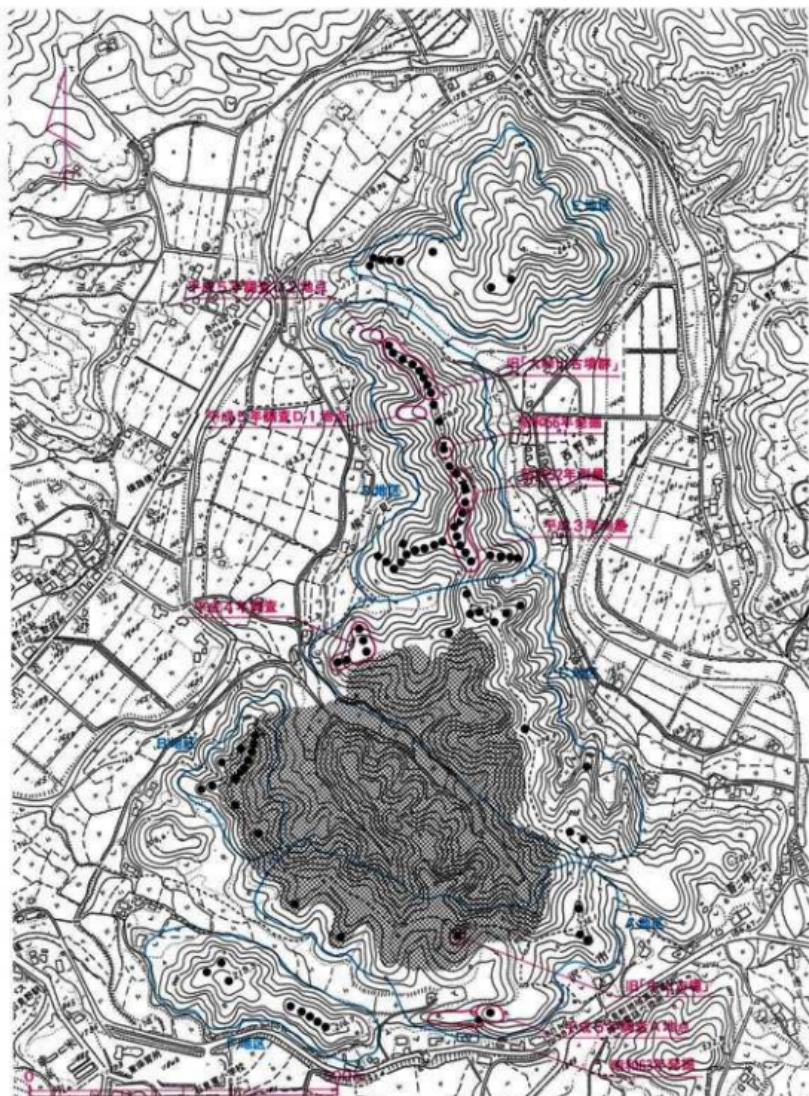
以上の調査結果のように、今回実施したD地区の調査については直接古墳と関連した手がかりを得ることはできなかった。



トレンチ掘り下げ状況 1



同 2



第6図 中山古墳群全体図 (1 : 10,000) (昭和52年分布図より作成一部加筆)

●墳墓 (▲: 前方後円(方)形と確認されたもの) ■: 昭和51年工事範囲

IV. 中山古墳群の概要

今回の調査では、A地区においてA-SK07が確認されるなどの新知見が得られ、また試掘調査によって古墳が分布しない箇所も確認された。本章では発見から今回の調査に至るまでの古墳群調査の概要を集約し、併せて近年の調査により明らかとなった周辺の墳墓についてその概要を述べる。

1. 古墳群調査の経緯と概要

本文冒頭の「I. 発見と経過」にて既述したように、過去数度の調査が実施されており、資料の蓄積がなされている。これを表にまとめると次のようになる。

調査年	内容	調査箇所	概要
1 昭和44(1969)	分布	D	D地区北端にて7基確認、大峰山古墳群と命名
2 昭和47(1972)	分布	A	A地区南端にて1基発見、中山古墳と命名
3 昭和51(1976)	発掘	A,B	第1次調査、古墳群の発見
4 昭和52(1977)	分布	全城	E,F地区の確認
5 昭和56(1981)	発掘	D-23	学術調査
6 昭和63(1988)	発掘	A-6	事前調査
7 平成2(1990)	測量	D-6,7,8,16,17	町内遺跡詳細分布の一環
8 平成3(1990) 1	測量	C-4,5,7,8,	町内遺跡詳細分布の一環
9 平成4(1992)	発掘	C-7	町内遺跡調査
10 平成5(1993)	発掘	A,D	実態調査

この表には、昭和51(1976)年の全域発見以前の発見を加えたものであるが、いまだ全城にわたる分布調査は昭和52(1977)年調査の1回だけで、測量は2回、発掘調査は5回行なわれている。分布調査、測量調査の回数が少ないため、墳形等の詳細や、個々の古墳の正確な位置について未確認の部分が多く、さらなる詳細分布調査が特たれる。

なお昭和51(1976)年の発見当初、(1)墳丘を伴わず、墓域を溝で区画した無墳丘墓、(2)盛土を施した、いわゆる古墳形式のもの、の2種に区分され、さらに遺溝の略号を、古墳をSK、土壙墓などをSX、溝をSDとして付けられている。以下、各地区別に、これまでの調査結果を概説していく。

2. A地区

昭和51(1976)年にSK01、昭和63(1988)年にSK06が発掘調査されている。そして今回の調査で、SK07が確認された。



A区丘陵中央部



全 景



A地区調査風景



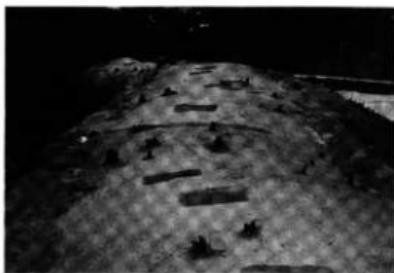
主 体 部

A-SK01

かつて「中山古墳」と呼称された古墳である。墳形は円形で、径9mと推定されるマウンドを有し、主体部として箱形石棺1が検出された。墳丘はその半分が削り取られ、主体部の石棺もおよそ1/3が失われてる。土層観察により淡黄灰色砂質土の地山に淡黄色砂質土を盛り土し、墳丘が構築されていることが窺われた。主体部は推定される墳丘の中央よりわずかに南に寄ったところで、主軸をほぼ東西に向け検出された。墓壙は淡黄色砂質土を除去した地山面から穿たれ、中央部をさらに掘りくぼめ、そこに石棺を仕組む、いわゆる有段土壤となっている。規模は墓壙短軸0.65m、石棺は東辺で短軸幅0.25m、掘削されている辺で0.3mと西側がやや広くなっていることから、頭位は西向きの可能性が高い。石棺の石材は厚さ3cm程度の板石を用いている。遺物は出土していない。

3. B地区

昭和51(1976)年に発掘調査が行われ、古墳ないしは、墳丘を有するもの5、溝によって区画された墓域7[◎]が確認されている。



B-区画墓群



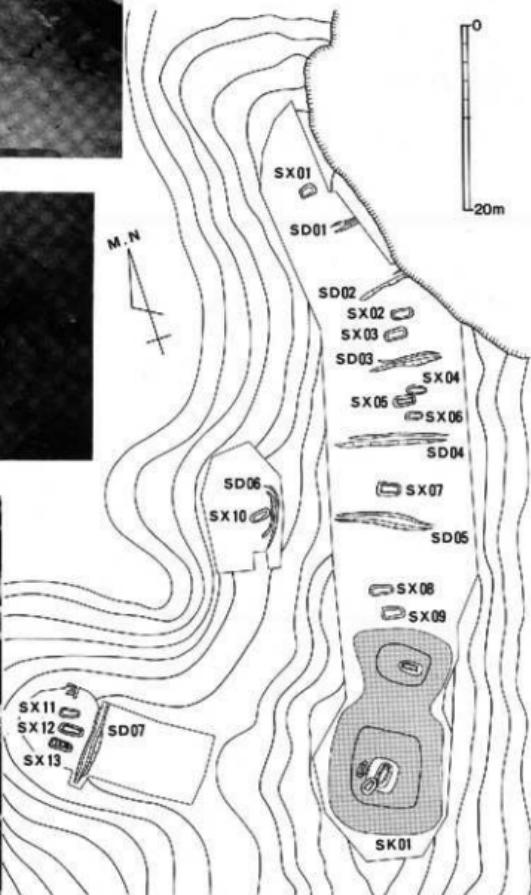
B-SX01



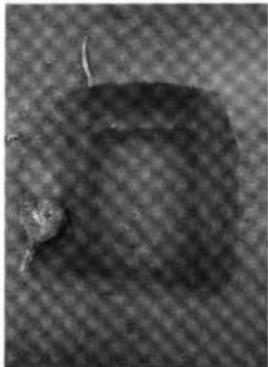
説明会

B-区画墓群

B地区主脈上に5、西側の支脈上に2の合計7の区画墓が検出された。こ



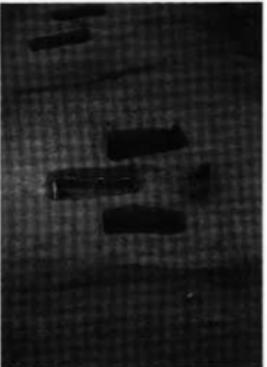
第7図 B地区北半部遺構配置図 (1:600)



B-SX01



B-SX04



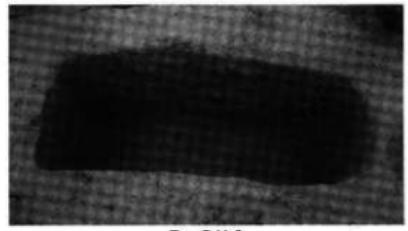
B-SX 4, 5, 6



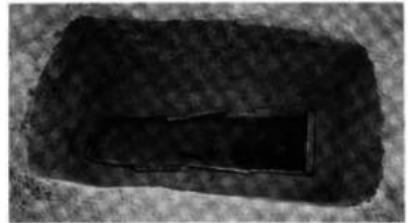
B-SX 2, 3



B-SX 5



B-SX 6



B-SX 7

れらすべて、尾根を直交する溝で区画し墓域を形成している。それぞれ1ないし数基の墓壙があり、箱形石棺、石蓋土壙、木棺墓の3種、合計13基の墓壙が確認されている。

遺物は、供獻土器がSX01,02,09,10,12の墓壙上面からまとまって出土。他に溝中などからも出土しているうちSX01,02,09,10には石（礫）が伴っていた。

これらの石は直系9.5cmの楕円形を呈するものから、長さ15.5cm幅5cmの棒状、他に板状のものなど多様で、擦跡が認められるものもある。



B-S X07



B-S X08



B-S X09



B西第2支丘



B-S X10



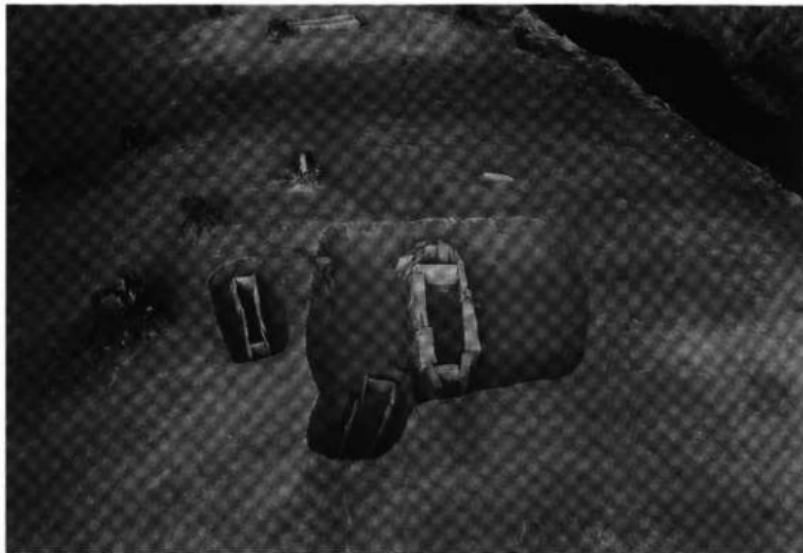
B-S X11



B-S X12



B-S X13



B-S K01

B-S K01

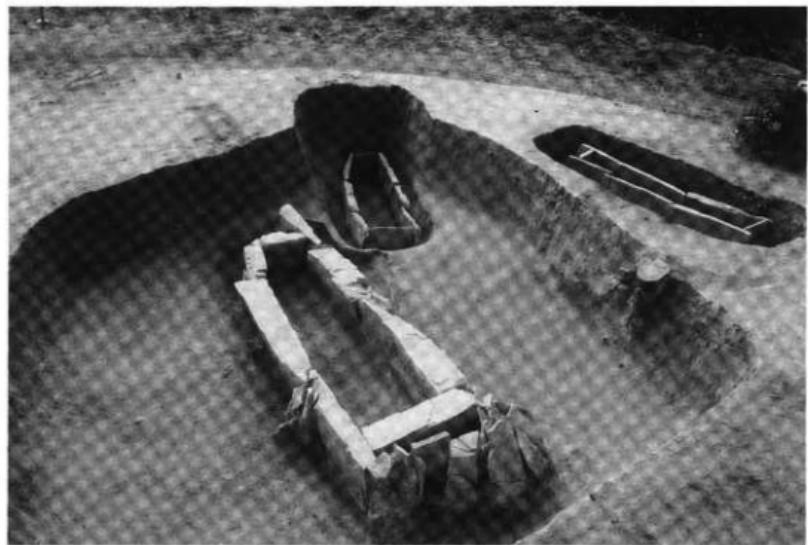
B-1号墳と呼称されている前方後方墳である。全長22m、後方部長さ14m、幅13m、高さ1.4m、前方部長さ8m、幅10.4m、高さ0.7m、くびれ部幅7.2mを測る。後方部に3前方部に1、計4つの墓壙があり、すべてに箱形石棺が埋置されていた。このうち第1主体が最も大きく、墓壙は検出面で長さ3.3m、幅3.1mの隅丸方形状を呈し、中央部をさらに掘りくぼめ石棺を仕組む、有段（二段）土壙で、石棺の北側小口には板石を立てた状態で半円状に囲む副室を伴う構造であった。



B-S K01



説明会



B-SK01 第1主体



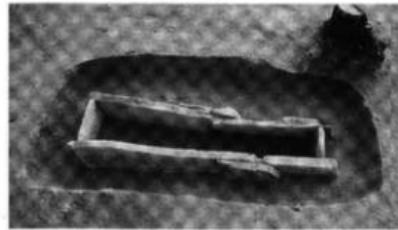
B-SK01 第2主体



B-SK01 第3主体



第1主体副室



B-SK01 第4主体



短甲出土状况

B-SK02, 03

B地区の主脈より西側に派生した支脈上に位置する。それぞれ一辺約7mの方形墳丘と推測され、SK02は墳丘と埋葬施設の大半を失っていた。SK03は石棺隅から鐵鎌1が出土した。

B-SX05

B地区からA地区に至るB丘陵の主脈上に位置する。方形の墳丘を有し、埋葬施設は箱形石棺1が埋置されていた。



B-SK02,03 調査前



B-SK02,03



B-SK03



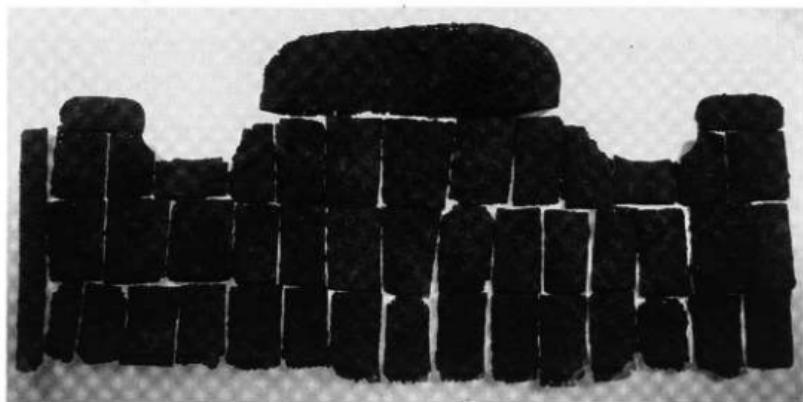
B-SK03 遺物



B-SK05



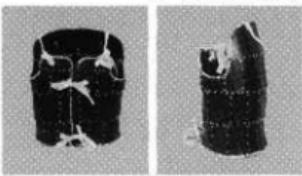
作業風景



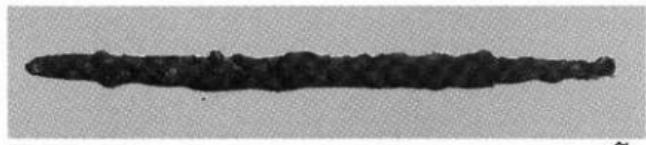
B-SK01出土 方形板革縫短甲



B地区出土土器



同上 復元品



剣



刀子



斧



剣



遺物は第1主体副室内より方形板革縫短甲1、鉄斧1、鉄鑿1、刀子1、棺内からは、頭骨（壮年男性）の両側に鉄剣2が副葬されていた。

土器は斜面より出土したもの、細片のため型式不明であった。

4. C地区

昭和51（1976）年に発見され、現状保存された地区である。

平成3（1991）年にS K07, S X04, S X05について測量がなされ、

平成4（1992）年にS K07が発掘調査されている。S K07は墳形は方形と推定され、墳頂部より箱形石棺4基が検出された。このうち第1主体は、長さ3.1



C - S K07



C - S K07全景



C - S X04



C - S K07主体部検出状況



同左



m、幅2.3mの墓壙から中央を掘りくぼめて石棺を仕組む有段土壙で、石材は厚さ3cm程度の薄い板石を用い、頭位側の小口に方形状に板石を立てる副室が伴う。



遺物は棺内より鉈1が出土したのみであった。SX04は方形の墳丘で北西南の尾根の先端方向に対しての3辺に石を巡らせており、その一部が露出している。測量時に墳頂中央より、土器片が30数点採集された。



5. D地区

現在のところ、古墳群中で最も多く古墳が分布している地区である。昭和44（1969）年に草地造成によって発見され、重圓文鏡や、樽形鏡が出土したとされる「大峰山古墳群」もこの地区に含まれる。

過去の調査としては、昭和56（1981）年にSK23が発掘調査されている。墳形は帆立貝形をなし、全長25m古墳群中では大形の古墳で、墓壙は合計6基確認されている。

平成2（1990）年の調査では、SK06,07,08,16,17が測量され、SK16が全長22mの前方後円墳であることを確認、またSK08は12×10mの長方形の墳丘で、その西辺には石列が巡らされている可能性のあることが、ボーリングステッキの探査によって判明した。

またSK08の東に位置するSK07では松根穴より、弥生時代後期とみられる土器片が採集された。

「大峰山古墳群」とされていた箇所は地区北端のSK27～33の7基とみられる。これら7基すべてのマウンドより石棺もしくは石材が確認でき、かつて吉川正氏が「大峰山古墳群」を紹介した際（吉川1972）の合計7基と合致する。他にSK24～26のマウンドも草地造成による削平を受けている。また、この造成によって、墳丘のほとんどを失ったと看取される箇所も認められ、重圓文鏡や、樽形鏡の出土場所を特定することは難しい。

これらの遺物と同じように当地区より掘り出されたとみられる箱形石棺の蓋石が尾根上におよそ1基分散乱しており、尾根東側中腹の山道沿いには石材を用いて供養塔が造られている。伝出土の重圓文鏡は、完存で直径63mmを測り、櫛齒文帯に円圏という文様構成であって、藤岡孝司氏による分類のI型に該当し、概ね庄内式期から布留式期にかけての時期の遺構から出土する例が多いとされる。

なお、掲載した第8図D-SK19～21測量図は、昭和52（1977）年に実測されたもので、SK20は前方後方墳の可能性が指摘されていた。現地を詳細に観察すると、前方後方形と



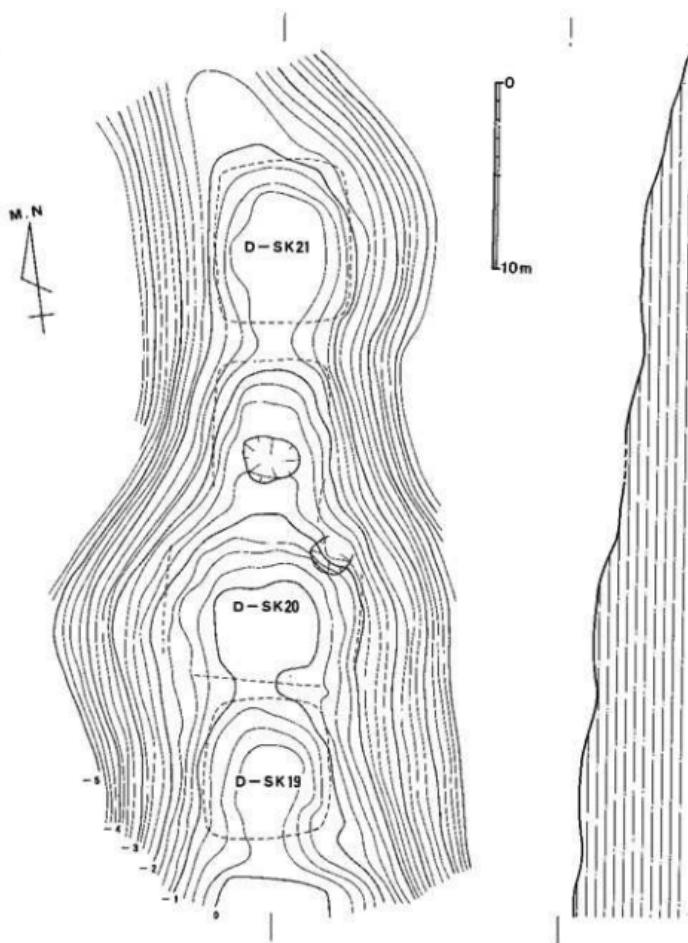
D-SK16全景



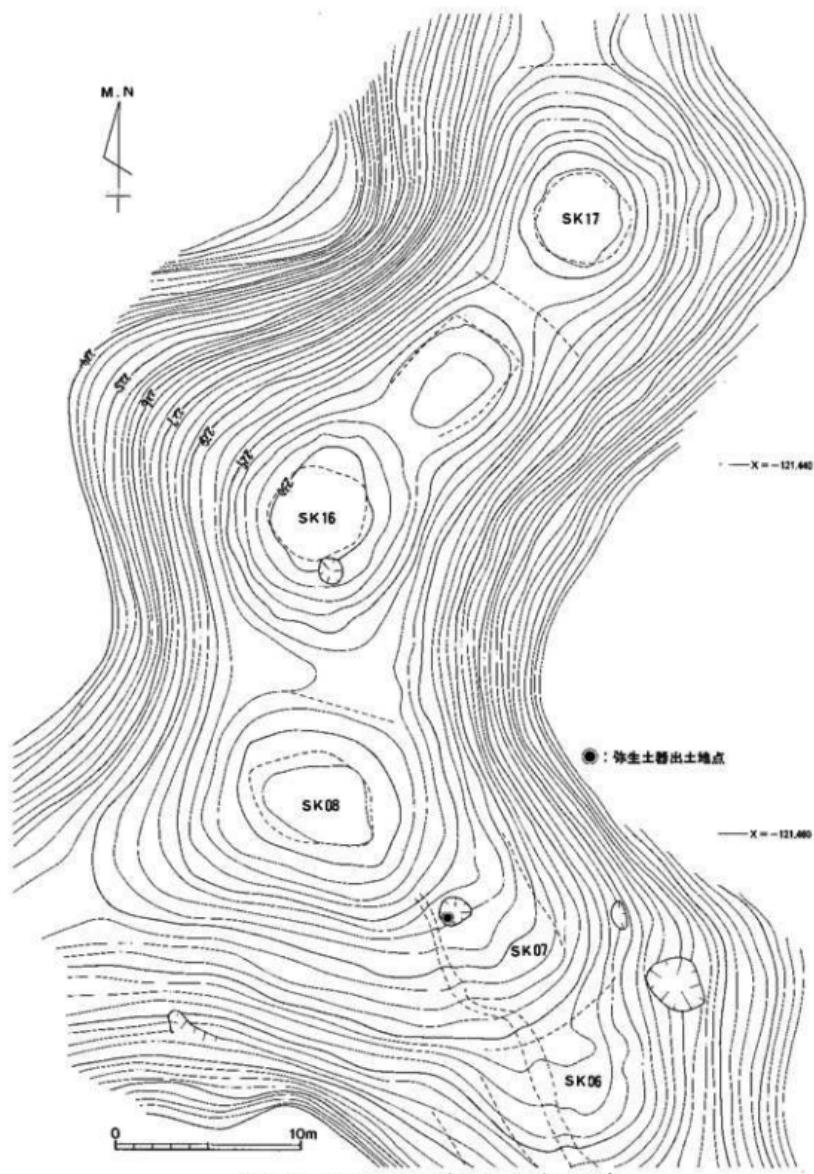
D地区出土重圓文鏡

するには「前方部」から「後方部」にかけてレベル差がありすぎるようすに看取され、この二つが別々の墳丘となりうる可能性が高い。

(註)藤岡孝司1991「重圓文(仿製)鏡小考－3～4世紀における小型鉢鏡の様相」『研究紀要V』財團法人君津市文化財センター



第8図 D-SK19~21測量図 (1:300)



第9図 D-SK16周辺地形測量図 (1 : 300)

6. 周辺の古墳群

中山古墳群には、これまで紹介したA～D地区のほかにE, F地区があるが、今まで調査されておらず詳細は不明である。

次に、中山古墳群周辺の墳墓が、開発に伴う発掘調査によって明かとなっているので、以下に概略する。

(1) 実藤古墳

中山古墳群E地区より北側、井原川を挟んで、二つ目の尾根上に位置する。周辺からの比高差は、およそ60mで、やや小高い丘陵の頂部に立地している。

平成5（1993）年に、土砂採取に伴う事前調査で発掘調査され、直径約10mの円墳であり、埋葬主体は木棺直葬、遺物は周溝より、土師器、U字形鋤先が出土している。



実藤古墳全景
穴



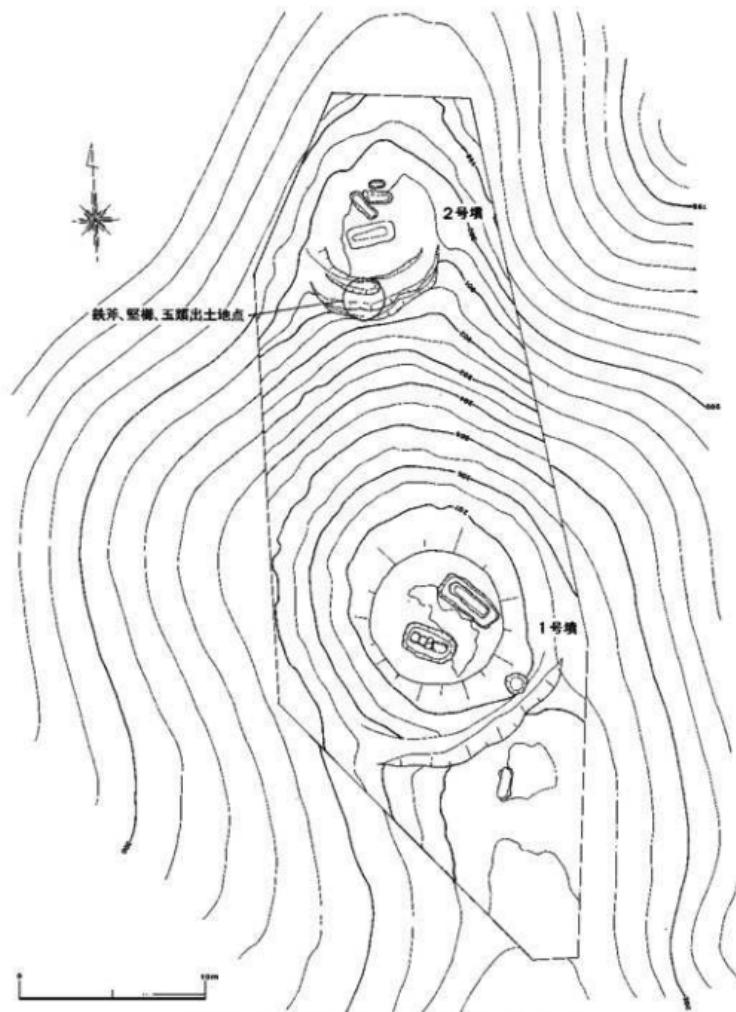
主体部



遺物出土状況

(2)下川原墳墓群

平成5年度～6年度にかけて、施設用地造成に伴う事前調査にて発掘調査された。古墳3基、横穴墓1基、土塙墓群が検出された。



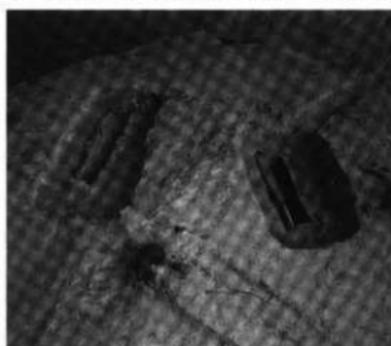
第10図 下川原1号墳・2号墳配置図 (1 : 300)

1号墳

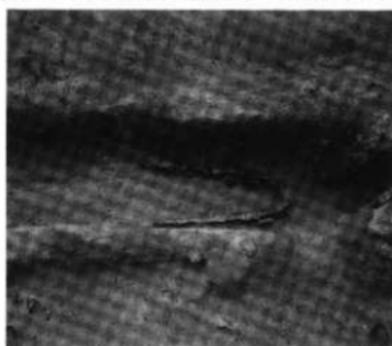
調査区東側尾根上に位置する直径17mの円墳で、箱形石棺1、木棺1が検出された。木棺を埋置した墓壙は有段土壙で、黄色粘土が「匚」字状に検出されたことから、棺材の合わせ口を粘土で密封したものと推定される。遺物は墳丘西南の溝中より、土師器、木棺埋置の主体部より、「U」字形に折り曲げられた鉄刀1とガラス小玉1が出土した。

2号墳

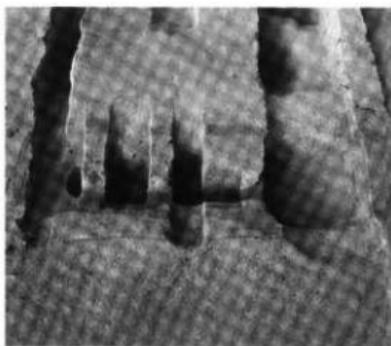
1号墳の北側約7m尾根を下った場所に位置する。墳形は推定で直径7mの円墳と推定され、有段土壙上を木蓋で被覆し、その周辺を赤褐色粘土で固定したとみられる埋葬主体が確認された。遺物は周溝中央のテラス状に地山を掘削整地したと考えられる面の上で、小型丸底壺1、有袋鉄斧1、刀子1、釣針状鉄製品1、堅櫛5、玉類238が一括出土した。



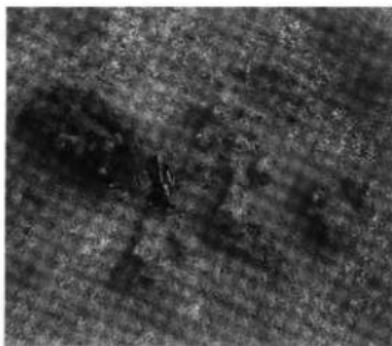
1号墳 主体部全景



1号墳 遺物出土状況



2号墳 主体部



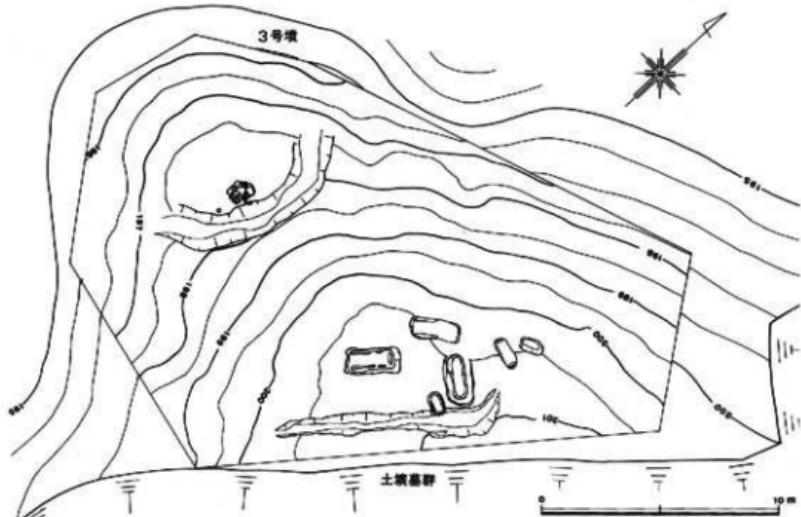
2号墳 遺物出土状況

3号墳

直径約10mの円墳と推定され、周溝より鉄製鍬先1が出土した。工事計画を変更し現状保存がなされたため、詳細は不明である。

土塚墓群

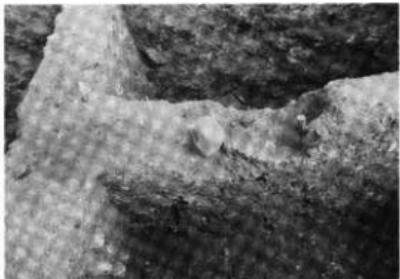
3号墳の東側、尾根上に木棺墓3、木蓋土塚2、土器蓋土塚1の合計6基と溝状遺溝1が検出された。このうちSK1は規模が最も大きく、墓壙上面から供献土器、長方形の河原石1が出土した。これらの遺溝の時期は弥生時代後期である。



第11図 下川原3号墳・土塚墓配置図 (1 : 300)



土塚墓全景



土塚墓遺物出土状況

V. 今後の課題

今回の調査の契機となったA地区の掘削は、古墳群保護の問題を再喚起させるものとなつた。冒頭で述べたように、本書の目的は概説的に網羅することであったが、その背景には、掘削の顛末として、遺跡としての周知、管理に対する取り組みの内省に基づくのである。

中山古墳群が、いかに保全されていくか、そのなかで地元の愛護活動や保存の要望のあることは重要である。なかでも特筆されるのはB地区SK01をめぐって、保存の署名運動が行われたことである。そうした観点に立つと次期に予定される過去の調査を総括した報告の刊行は、重要な意義があることはいうまでもない。

さて、今回の調査であるが、A地区1カ所、D地区2カ所についてトレンチを設定し、調査を行った。結果としてA地区において墳墓の所在が明かとなつたことは先に述べたが、遺溝、遺物が確認されなかつたD地区の2つの調査区についてあらためてふれておく。

D1、D2のいづれの調査区もD地区主脈より西側に派生する丘陵で、主脈よりわずかに下がった場所である。表面観察ではマウンドは確認されていなかったので、当初は土壇墓の存在を想定した。結果として、現時点ではD地区は主脈上にしか墳墓の所在がないという評価となつた。しかし、調査区の地形をみると傾斜、尾根の幅は、中山古墳群のほかの場所に比べて遜色は無く、分布の空白といえよう。これは、築造の順番、築造箇所の予定、築造される時期等、さまざまな問題を含んでおり、一概に評価できないが、中山古墳群の尾根上でも墳墓がある場所と、ない場所が確認されたことは一つの成果といえる。

次に、今後解決していくであろう課題をあげておく。

(1)古墳群の評価として重要な事柄は、造営開始と終了の時期についての問題があげられる。今回紹介した下川原墳墓群の在り方を見れば、弥生時代後期前半、V-1様式の時期の遺物を作つた上墳墓が検出されている。中山丘陵中でも、同じ時期の土器がD地区SK07にて採集され、これまで中山古墳群の初現といわれていたB地区十塙原群の弥生時代後期後半から終末という時期よりも古く、墳墓の造営が始まったことを示しているとも考えられる。

中山古墳群中の最も新しい要素としては、過去に大峰山古墳群から須恵器の樽型甕が出土したという伝承がある。このことについて門脇俊彦氏は「伝承を肯定したとしても、それは後出する一部の古墳の存在を意味するもので、この古墳群の大部分が未済器出現以前に形成されたであろうことを否定するものではない」(門脇1982)として、「5世紀前半に

かけて」との時期を古墳群の終末とみている。今回本書で実藤古墳をとりあげたが、その築造時期は6世紀に降り、立地は中山古墳群と類似している。これが、「後出する一部の古墳」の例で、同様な古墳が中山古墳群中にまだ点在していたともみることができる。問題は、それがどの程度、中山古墳群中に位置しているかであろう。またこの時期まで、同じような立地で古墳が造られ続けていることも間違いない、古墳群の終末の年代が下がる可能性は否定できないのではないだろうか。

(2)何故、これ程多くの古墳（墳墓）が築造されたのかという事柄も重要である。これについては過去に鉄生産との関連で考えられている。昭和52(1977)年に刊行された『中山古墳群発掘調査概報』では、「単に農業生産力だけでは理解し難いものがあるといえる。石見山間部は、出雲などとともに古くから良質な砂鉄の埋蔵地帯として著名なところであるが、この中山丘陵における一大古墳群の存在は、あるいはその背後にそうした砂鉄生産といったものを考えるべきではなかろうか」と推定している。また門脇俊彦氏は「中山古墳群の形成は邑智高原における鉄生産とのかかわりにおいて理解するべきだと思うのである。しかし、当時この地で生産された鉄の多くは地元には還元されずそれは6世紀後半にはじめて可能となり、このことが後に第2期の社会変革を招來した要因であったんだろうと考えられる」(門脇1982)とより具体的に想定している。

傍証するには、古墳個々の在り方など古墳群の詳細と、加えて周辺の集落遺跡にその根拠となる特質が認められるのかが問題となろう。

なお、B-S K01より出土の鉄斧については走査型電子顕微鏡、X線マイクロアナライザーによる金属学的調査が行われている。(清水欣吾1988「島根県の古墳より出土した鉄器の化学分析とその金属学的調査」『山雲岡田山古墳』島根県教育委員会)

(3)今後さらに継続して調査を行う上では、いうまでもないが、全体の保全を図りながらいかに計画的に実施できるかが、問題であろう。これまでの調査をふりかえると、いくつかの成果をあげているが、系統立てを行われていないことは、その非を否めない。過去の成果を総括し、今後の調査研究を行わなければならないことは論をまたない。

中山古墳群関係記載報告等一覧

- 吉川 正 1972 「遺跡と遺物」『島根県邑智郡石見町誌』石見町
門脇俊彦 1976 「原始・古代」『続邑智郡誌』
前島己基・松本岩雄・三宅博士 1977 「中山古墳群発掘調査概報」石見町教育委員会
吉川 正 1977 「石見町中山古墳群『郷土石見』」石見郷十研究懇話会
三宅博七 1977 「中山古墳群の発掘」『季刊文化財』28号 島根県文化財愛護協会
今岡 鑑 1978 「中山古墳群発掘調査概報を読んで」『歴史学通信』第2号 島根大学史学研究室
前島己基 1978 「第3章 先秦期古墳の地域相 6 石見」「山陰古代史の周辺」中 山陰中央新報社
門脇俊彦 1982 「中山古墳群発掘調査報告書」「石見町の遺跡」石見町教育委員会
三宅博七 1986 「弥生時代から古墳時代初頭のいわゆる山陰系土器について」資料 第18回埋蔵文化財研究会事務局
三宅博士 1988 「第24回埋蔵文化財研究集会 定型化する古墳以前の墓制」 埋蔵文化財研究会
宮本徳昭 1989 「島根県邑智郡石見町中山古墳群発掘調査報告書」石見町教育委員会
山本 清 1989 「山陰の鼓形器台と当代の墓制」「出雲の古代文化」六興出版
田中義昭・中田健一 1991 「石見町内遺跡詳細分布調査報告書」一石見町の遺跡 第2集—石見町教育委員会
松本岩雄・柳浦俊一 1991 「3須恵器の編年 3山陰」「古墳時代の研究」6 雄山閣
中田健一 1992 「石見町内遺跡詳細分布調査報告書」—石見町の遺跡 第3集—石見町教育委員会
島根県立八雲立つ風土記の丘編 1992 「古代の出雲と朝鮮半島」木耳社
松本岩雄 1992 「8石見地域」「弥生土器の様式と編年」木耳社

石見町文化財調査報告書 第7集

中山古墳群実態調査概要報告書

発行 1994年3月
編集 石見町教育委員会
〒696-01
島根県邑智郡石見町大字矢上7493
TEL (0855) 95-1210
印刷 柏村印刷株式会社
